

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	有床診療所における末期癌患者の後方支援
演者名	小野宏志 1) 西澤由佳 1) 鳥羽昭三 1) 細田修 2) 小野秀子 1)
所属	医療法人社団心 坂の上ファミリークリニック 1) 坂の上在宅医療支援医院 2)

目的

自宅で最期を迎えたいと思っている国民が 6～8 割であるのに対し、実際の在宅看取りは 1 割を少し超えるくらいである。在宅療養をしている末期癌の患者においても、やむを得ず在宅療養を理由で諦めなければいけない場合がある。当法人は、症状の悪化、強い不安感、家族の疲労、介護力の低下等の理由により入院が必要になったとしても、できる限り自宅に戻れる様なサポート体制構築すべく有床診療所を開設した。有床診療所における末期癌患者の経験を報告する。

実践内容・実践効果

当法人は有床診療所を平成 26 年 2 月 1 日に開設し、平成 26 年 8 月 31 日までに延べ 129 名の患者の入院を受け入れた。そのうち末期癌の患者の入院は延べ 31 名であり、実際の入院患者としては 23 名である。4 名の患者は複数回の入院で 2 回が 2 名、3 回が 1 名、5 回が 1 名である。

23 名のうち、入院中の看取り 12 名、転院後の看取り 1 名、退院し在宅医療を再開したが他院に入院し看取り 1 名、現在入院中 1 名、そして自宅での看取りが 7 名である。

2 回入退院を繰り返した患者は二人とも入院中の看取りとなった。しかし、介護力がない家族であったものの、いつでも往診を依頼できることと同じように気軽に入院を依頼できるという有床診療所の身近な安心感から自宅に一旦は戻ることが出来た。この自宅での時間は、患者本人にも家族にも有意義であったと思われる。3 回の入院を繰り返した患者は強い不安感からの入院であったが、最終的に退院し自宅での看取りとなった。5 回目の入院中の患者は、近日中に退院予定である。

考察

自宅に戻りたいが、病院にいる安心感から自宅に戻れない患者は少なくはない。在宅療養の延長として身近に入退院を出来る後方支援ベッドがあることで退院でき、安心した在宅療養が可能となり、在宅での看取りが出来るようになる。

有床診療所は、身近な存在としての後方支援機能を十分に発揮し、地域社会に貢献しなければならない。